

あとがき

ドクターヘリ、すなわち救急飛行は航空と医療という全く異なった二つの分野による協働事業である。両分野ともに高度な知識と精緻な技術と豊富な経験を必要とし、しかも危険を伴う。したがって両者の協調が充分でなければ、その危険が表面に浮かび上がり、人命にかかわる事故を招く。

そうした事故を如何に防ぐか。それを考えるのが今回の共同研究であった。ドクターヘリにたずさわる職種の、それぞれの皆さんに参加していただき、討議を交わして積み上げたのがこの報告書である。

しかし当然のことながら、文書だけでは安全は保てない。文書や規定にもとづく管理、監督だけでも安全は維持できない。当事者の意識と意欲が重要であり、実行または行動がともなわなければならない。

当事者とは、ヘリコプターの搭乗者だけではない。その飛行を支える地上職員はもとより、運航会社や病院の管理職者や経営者、そして救急、消防、警察、さらには道路、空地、河川敷などの管理者から最後は一般市民まで、あらゆる人がドクターヘリの当事者にほかならない。

この人びとの実行と協力があって、初めて安全は成り立つ。本報告書は、そうした人びとへ呼びかけたものである。

繰り返しになるが、この報告書はドクターヘリの安全を確保するためには如何に考え、如何に実行するか。その糸口を探ったものである。この糸口が、当事者の安全のための現実的な行動に結びつくことを願うばかりである。

ドクターヘリは今、日本中で毎年1万回近い飛行をしている。この出動要請は数年にして倍増するであろう。すべては人の命を救うためだが、それが逆の結果になってはならない。

安全のための方策には限りがない。これで大丈夫、これで安心というときはこないかもしれない。それだけに、今こそが安全のための施策を実行に移すときであろう。ドクターヘリがもっと増加し、人命救護のために安全に飛びつづけることを願ってやまない。

(西川 渉)